

## 見所多かった「長崎と齋藤茂吉展」

### 長崎を去って今年がちょうど九十年

堀田 武弘

歌人・齋藤茂吉が長崎に第一步を印したのは大正六年十二月十八日夕刻だった。この日の長崎は本格的な冬將軍の到来、長崎駅頭に立った齋藤茂吉は、



左より永見徳太郎、齋藤茂吉、某人、竹久夢二、他  
(大正七年永見邸にて)

「あはれあはれここは肥前の長崎か 唐寺(からでら)の躰(いらか)にふる寒き雨」  
「朝あけて船より鳴れる太笛(ふとぶえ)のこだまはながし竝(な)みよるふ山」

と詠んだ。そして長崎医学専門学校教授としての勤めを終えた大正十年三月十六日、「行春(ゆくはる)の港より鳴る船笛(ふなぶえ)の長きこだまをおもひ出でなむ」と詠み、長崎の街に、港にこだまする船笛と唐寺を思い出とし東京に戻り、ヨーロッパ留学へと旅立った。丁度九十年前のことである。茂吉ゆかりの品々を

集大成した「長崎と齋藤茂吉展」が、昨年暮れから今年二月までのおよそ二ヵ月半、市立長崎歴史民俗資料館で開催された。永松実館長は齋藤茂吉展開催が念願だったらしく、筆者にも展覧会への協力を求められ二人して資料集めに奔走したが、およそ一〇点余りを展示することが出来た。本格的な茂吉展は長崎では初めてのことである。

展示物の中心となったのは長崎時代の茂吉門下生の一人・立石瓊華(けいか)が残した品々で、折り本歌帖、短冊、写真、書籍等をご子息の立石義貴氏から借用することが出来た。立石瓊華は、長崎の通信関係所に勤務した人で、茂吉愛弟子の一人であった。長崎時代の齋藤茂吉が写る代表的な写真に、大正十年三月十三日、地元アララギ歌人たちと写った送別記念写真があるが、この中に立石瓊華もいる。

寺院所蔵の掛け軸も借用した。長崎市伊良林の光源寺、この寺と齋藤茂吉の関係はかなり深い。歌集『つゆじも』によると大正八年十月三十日に光源寺を訪れている。当時の光源寺住職は十二代活雷師、この頃、光源寺には東本願寺の曉鳥敏師(あけがらすは)が度々訪れ講話を行っていた。この講話を聞くために参拝したのが「仏教研究会」を結成していた長崎医学専門学校(の医学生たちで、茂吉も教え子達からこのことを聞き足を運んだのである)。茂吉の生まれ郷里は山形県金瓶村(かななかめ村 現・上市市)で生家の隣は茂吉に多大な影響を与えた佐原隆心和尚の宝泉寺で、幼少期にはお坊さんになりたいと思ったこともある茂吉だけに、寺への参拝は自然なことだったのだろう。光源寺に残る短冊等の裏書を見ると茂吉は度々足を運んでいたようだ。曉鳥敏師が長崎を訪れ、茂吉を偲んでしたためた書も展示することが出来た。光源寺書院で詠んだ歌、

「子規を思ひ左千夫を思ひ枇杷をおもふ 五月の旅に君と相見て  
大正九年五月 長崎にて茂吉に贈る歌」

光源寺と同じ鍛冶屋町の真宗寺院・大光寺も歌集『つゆじも』に詠んで

いる。当時、この寺には現住・三浦達美師の伯父で歌人として知られた三浦達雄師がいた。達雄師は若くして結核により夭折するが、大正九年五月、達雄師一周忌の折に茂吉が詠んだ七首がある。

「藤浪の花は長しと君はいふ 夜の色いよよ深くなりつつ」

この他、大光寺には大正七年五月に長崎を訪れた大正ロマンの叙情画家・竹久夢二に関したゆかりの品も残る。この旅で夢二は素封家で文化人でもある銅座の永見徳太郎氏の豪邸に逗留し異国情緒を満喫、この時、茂吉をはじめ地元歌人たちは歓迎会をもうけている。その席で夢二は徳太郎婦人の帯地に即興の歌をしたためた歌帖ともいべき珍品も残した。

春の鳥春をかなしとおもいそめ 木の葉がくれに鳴きにけるかな

この席上、永見徳太郎邸で写った写真は長崎での竹久夢二の姿を残した唯一のものである。「齋藤茂吉展」には長崎県立図書館所蔵の永見徳太郎のゆかりの品々も展示したが、その中には「齋藤茂吉全集」には掲載されていない全国的に見れば未公開のものが多かった。二人の間で交わされたハガキ二通が残っている。戦前のものは宛名が「市内銅座町廿番」の永見夏汀へ出されていて、茂吉は歌三首をしたためている。その中の一首

南京の羹(あつもの)を我に食はしめし 夏汀が婦(つま)は美しきかな  
また戦後、永見に届いたハガキは、永見が晩年に移り住んだ熱海市西山五七七磯八荘に届いたもので、二人の交遊は途切れることなく続いていた。

齋藤茂吉に関しこれまでに数多くのご教示をいただいた山形県上市市「齋藤茂吉記念館」には、今回の齋藤茂吉展に関する写真、リスト等の資料を多数寄贈させて頂いた。同館の研究員・村尾二朗氏からお礼の言葉が届いた。

長崎で初めて開催の齋藤茂吉展、これほどまでに多くの資料が残っていたということは、長崎人と茂吉はいかにゆかり深かったかということの表れだろう。このことが私には一番嬉しかった。

(NBC長崎放送勤務 ライブラリー担当)

## 風信

〇十月九日 長崎くんち終了、十月十五日 若宮神社竹ン芸終了。私は何んだか今年の行事が全て終わったような気がしました。

〇次の日、戦後より今日まで国史跡「貞観園(新潟県柏崎)の保護運営に力を尽してこられた渡辺庸一先生より「もう私も八十才を過ぎたのですよ……」との御連絡があった。私は若いころ先生にお伴して良寛の五合庵に行った事を思い出した。良寛和尚の歌に

月よみの光を待ちて帰りませ 山路は栗のいがの多きに

〇次の日、柳川郷土研究会の方々二十五名来崎。柳川藩長崎蔵屋敷跡、柳川に関係のある榎津町・東古川町・筑後町等を案内。昼食はチャンポンと言われる。私は「長崎ではクンチの日、昔は泥鰌(どろこ)を食べたそうですがこれも柳川からきた食文化ですか」と尋ねた……最後に皆さんが「長崎は本当に坂が多くてキツカですね」と言われた。印象的な言葉でした。

〇秋は読書の季である。各方面より多くの資料を戴いた。

先づ江頭洋子女史より歌集『雲のフェルマータ』を戴いた。女史の歌は明るく光にみち、ユーモアもまじえられていた。(角川書店・二、七〇〇円)

〇神奈川大学日本常民文化研究所より、『民具マンスリー』他四冊(東日本大震災被災地に於ける資料保存活動・飛騨の雪形・会津農書等)

〇呉昌碩の研究『著者の松村茂樹先生より。長崎には縁故の深い呉昌碩についての研究は現存する第一の資料であり、私には大いに参考になった。(山本書店研文出版・七、〇〇〇円)

〇『崎華往来』大隈孝一先生著、先生・事務所に来訪され、本書を御寄贈して下さいました。「この本は表裏の紙がありません。右から読むと崎華往来(長崎と中国ひいては世界交流史)裏面(左)からは龍馬精神と明治維新と改革の時間・空間を立体的に交差させた文章である」と著者は記しておられる。(オフィス限刊・一、一〇〇円)

〇『長崎県の石炭産業と近代化遺産』長崎県の近代化のために造られた造船施設・橋梁・水道・通信・防衛等を楽しみながら学習・活用のため長崎近代化遺産研究会により出版(事務局・長崎市今博多町宮川ビル2F・TEL 八二二一四六〇五)

〇『樂十三号』今集は上海特集の写真にはじまり、ナガサキと洋楽、ナポリの辯「長崎漫歩」など……(イーズワークス発刊・一、〇五〇円)

〇『長崎遊学』長崎くんち入門百科「長崎くんち塾編。阿野謙氏編集のくんち年表は大いに参考になった。(長崎文献社刊・一、〇〇〇円)

長崎歴史文化協会研究室

TEL 八二二一五四〇

十八銀行公会堂前出張所2F

